

氏 名：矢ヶ崎 香
学 位 の 種 類：博士（看護学）
学 位 記 番 号：甲 第56号
学位授与年月日：平成26年 3月14日
学位授与の要件：学位規則第4条第1項該当
論 文 題 目：経口化学療法を受ける再発、転移性乳がん患者の療養体験
Experiences of Patients Living with Recurrent Metastatic
Breast Cancer under Chemotherapy
論文審査委員：主査 武 井 麻 子
副査 守 田 美奈子（正研究指導教員）
副査 筒 井 真優美（副研究指導教員）
副査 本 庄 恵 子
副査 佐々木 幾 美

論 文 内 容 の 要 旨

【研究の背景】

近年、がん医療の発展により国内外で急速に開発が進んでいるがん化学療法は、静脈投与から経口剤へと、その投与方法が変化している。経口化学療法は穿刺による侵襲がなく、簡便なため患者の QOL を挙げるという利点がある。一方で副作用の判断や対応は患者に任される等、患者にとってはセルフケアの課題が増える。新たな治療法に対する看護援助方法の開発は今後の重要課題となっている。さらに、この薬剤の適応となる再発、転移性乳がんの患者は、がんの進行への恐れや死の脅威、生活上の困難も抱えていると思われる。そこで経口化学療法を受ける再発、転移性乳がん患者のニーズに応じた看護のあり方を探究するためには、まず当事者の体験を明らかにする必要があると考えた。

【研究目的】

本研究の目的は、再発、転移性乳がん患者がどのように生活を送りながら、経口化学療法を続けているのか、当事者の視点から明らかにすることである。

【研究方法】

1. **方法**：経口化学療法を受ける再発、転移性乳がん患者の療養体験を明らかにするために質的記述的研究を行った。
2. **研究参加者**：大学病院の外来に通院中の経口化学療法を受けている再発、転移性乳がん患者とした。主治医や外来看護師長が面接を行うことが可能と判断した 35 歳から 60 歳代の女性で、研究への協力の同意が得られた 4 名を研究参加者とした。
3. **データ収集**：2011 年 12 月 22 日－2013 年 6 月 1 日に実施した。都内大学病院の一施設の外来で、インタビューガイドを用いて半構成的面接法による面接を行った。4 名の対象者に対し、30

分から 60 分のインタビューを 3-4 回行った。

4. 分析：データを熟読し、研究指導教員のスーパーバイズを受けながら療養経験のエピソードを抽出した。患者ごとに事例として再構成し療養経験の特徴を記述した。

【結果】

研究参加者は経口化学療法を受けている再発、転移性乳がん患者 4 名で、年齢は 30 歳代 1 名、50 歳代 2 名、60 歳代 1 名であった。既婚者は 2 名、未婚者 2 名であった。経口化学療法を開始して 2 年間-8 年間が経過していた。

1. 治療と生活のバランスの揺らぎ：A さんの体験

A さん(50 歳代)は実母を看取ることを使命としており、経口化学療法を自分らしく生きるための救世主と意味づけて、治療を続けながらも自分の生の充実を大切にしていた。仕事をして自分のスタイルを大事にしてきた A さんにとっては、生命を守ることと外観の美(容姿)を維持することが重要であった。A さんはこの二つの「価値の狭間での慎重な治療選択」を行い、また下痢等の副作用の苦痛を和らげるための服薬方法を模索していた。A さんは死の脅威が強まると、病状が安定するようにと「願いを込めた服薬行動」をとっていた。一方、医師から様子みようかと言われると、自分を癒すかのように薬をスキップすることもあった。このように病状の深刻さや死の恐怖が高まると服薬を慎重にしたり、病状が安定し、不安が和らぐと自分の生活や自分らしい生き方を重視して容易に抗がん剤をスキップしたりしていた。このように病状によって服薬の判断や行動は変化していた。

2. 「普通の生活」を維持することの価値：B さんの体験

B さんは(50 歳代)、経口化学療法に対して、安心して生きるための「安心料」だと意味づけて、ボランティアや仕事など活動的な日々を送っていた。

最近、医師から病状が安定しているので治療を休止しようかと相談されたことがあったが、B さんは医師が迷っている様子を見て、服薬の辞め時を躊躇しながら治療を続けていた。経口化学療法を受けて 8 年目であるが、治療の服薬時期と休薬時期の切り替えが難しく、飲み始めることをすっかり忘れていたり、時には意図的にスキップすることもあった。このような自分の行為に対して「ずるしてる」という罪の意識を表現したり、乳がんのほかに大腸がんの病歴をもつ自分を「前科者」と語ることもあった。B さんが服薬を続ける根底には、「普通の生活」を維持するという価値感があり、その生活を得るための治療として抗がん剤を意味づけていた。

3. 元気に生きるためのがんと抗がん剤との狭間：C さんの体験

C さんは(60 歳代)、毎晩、翌日に服薬する錠剤をコースターに準備することが日課だった。しかし、準備していてもすっかり忘れることを繰り返していた。この行為には医師との関わりも影響していた。医師の言葉や表情から、飲み忘れても大したことのない薬だと C さんは捉えていた。逆に化学療法による重篤な副作用の経験を過去にもっていたことから、過剰に飲むことで副作用が重症化することの方が怖いと C さんは感じていた。そのため元気な身体に害となる抗がん剤を飲む必要があるのかという疑念を持ち、抗がん剤を服薬することの意味を探していた。

4. 孤独の中で「いいこと」を期待して続ける服薬：D さんの体験

D さんは(30 歳代)、経口化学療法を飲み忘れることは一切ないと言い切るほど完璧に服薬をしていた。しかし、服薬の行動では「自分自身を鼓舞」し、「飲まなきゃ死んじゃう」と、命を保つためには不可欠なものと治療を意味づけ、緊張感の中で徹底的に服薬を管理していた。若年性乳

がんと診断された時から、再発のリスクが高いという説明を受け、現在に至っても病状が不安定で、常に死の恐怖を身近に感じていた。Dさんは、このような厳しい状況のなかで、10年生存を目指して治療を続けていた。生き延びている父親の癌体験もDさんの支えであったが、「生きていれば何かいいことがある」と信じる気持ちと希望がDさんを支えていた。一方では、乳がんを発症後、友人、知人との関係性を絶ち、仕事も退職し、年月を重ねるにつれ社会との繋がりが途絶えていった。最近では通院時の主治医との関わりと、ネット上での他者との関わりが唯一自分の存在を認識する機会になっていた。家族や医療者を含めた周りとの関係性において孤立が深まり、Dさんは苦悩していた。

【考察】

本研究の研究参加者は、自分の生命と生活を天秤にかけながら服用を判断し、薬を意図的にスキップしたり、うっかり忘れたり、あるいは逆に確実に服薬していたといえる。

その服薬行為の根底には、経口化学療法への価値や感謝という肯定的な感情と治療への疑念などの否定的な感情があり、その狭間で葛藤していると考えられた。すなわち、経口化学療法を受ける研究参加者は、アンビバレンスの状態（杵淵, 2006: 杵淵, 2008: 広瀬, 2010b）にあると考えられた。その複雑な感情の狭間から生じる服薬行動には、経口化学療法への意味づけや必要性の認識が影響し、がんや死への脅威が高まると厳密な服薬行為に意識が向き、一方、病状が安定し死の脅威が和らぐと治療効果よりも抗がん剤の毒性への懸念や自身の生活や趣味、価値などを含めた生き方への意識が高まり、薬をスキップするといった行為が生じていた。特に再発、転移性乳がんという状況にある患者にとっては、治療効果そのものが不確実なため、自分の生活やこれからの生の充実などを天秤にかけながら、自分で判断し行為するという特徴があったと考える。参加者にとって重要なことは、パンを焼くこと等の自分の趣味、自分らしい姿の維持、外出等、健康だった時には当たり前で、それを疑うことのなかった、しかし今では失う可能性のある「普通の生活」を営むことであった。その維持を基準に服薬行為の判断をしていた。また、研究参加者が意図的にスキップすることには自分へのご褒美や自分を癒すという意味が含まれていた。過度な緊張感を維持している研究参加者にとって、抗がん剤をスキップすることはがんから解放され普通の生活を感じ取れるひと時だったのだと考えられた。

服薬の判断には、医師との相互作用が大きく影響していると考えられた。医師の診察時の口調、表情、雰囲気を通して、病状を捉え、経口化学療法に対する意味づけを行い、服薬行動が変わっていた。また、過去の抗がん剤治療による苦痛が身体に記憶され、それが経口化学療法に対する脅威等の複雑な感情をもたらしていた。

Dさんのような服薬をきちんと守っている若い患者は、その心中にがんの脅威による強い緊張感を維持していることが示された。若い患者は仕事の継続や社会的関係の維持に困難を極め、医療者を含む周囲の人や家族からも孤立していく状況があることも示された。

【看護実践への示唆】

長期的に治療を続ける再発転移性乳がん患者に対しては、継続的に看護を提供するための方法や場（外来看護相談など看護システム）の検討が不可欠であることが示唆された。

論文審査の結果の要旨

経口化学療法による治療は、日本ではまだ始まったばかりと言えるほど新しい治療法である。今後は、がん患者の増加と共に、治療適応となる患者は増加することが予測される。このような治療を受ける患者の看護に関する研究はまだ少なく、今後、がん治療の進歩に伴う看護のあり方を考える上で、また経口化学療法を受ける再発、転移した患者の看護を考える上でも、非常にオリジナリティが高く今日的なテーマであると評価された。

本研究は、外来通院する患者に対し、インタビューを半年から1年間かけて複数回行い、患者の経時的な経験の変化を追いかけている。その結果を、4名の患者の個別の体験として記述している点に特徴がある。研究結果から、再発、転移した乳がん患者は、病状やがんへの認識の違いだけでなく、家族関係や生活の仕方、価値観等により、それぞれに多様な体験をしていることが明らかとなった。結果では、参加者のそれぞれの生活や感情、価値観等が服薬行為と深く関連し合っており、病状変化やその理解の仕方、患者の価値観や生活の変化等によって、流動的に変化する様子がリアルに描かれており、患者理解を深めることができると評価された。特に、薬物をスキップすることや、逆に服薬を厳守することの背景に抗がん剤や死に対する複雑な思いがあり、さらに普通の生活を営むことへの強い思いがあることなど、患者の行為の意味を考えることの重要性を示しており、看護のあり方を考える上で、重要な示唆を与えたと評価された。さらに治療を厳守している若い患者が抱えている深い孤独等、患者が抱える問題の深刻さを記述しており、今後の看護実践に重要な示唆を与えると評価された。

博士学位論文審査専門委員会では、申請者に対して質疑応答を行い、審査の結果、本論文を学位規程第3条により、博士（看護学）の学位論文としてふさわしい水準にあると認め、「合格」と判定した。